

漁況・海況予報事業

(抄 録)

佐 藤 晋 一 ・ 塩 垣 優 ・ 川 村 俊 一 ・ 大 川 光 則

漁 況

平成8年度はスルメイカの全県的な好漁、日本海のブリ・マダイ・ヤリイカ・ウスメバルの好漁、八戸及び日本海のマイワシの激減、八戸のマサバ及び日本海のアブラツノザメの不漁が特徴的な漁況となった。

沿岸域におけるスルメイカ一本釣漁は最盛期である7月に太平洋及び津軽海峡で過去7年間で最高となり、年間漁獲量も1989（平成元）年以来最高の2万7千トンとなった。津軽海峡側では7月から10月にかけてそれぞれ1200トン以上の漁獲がみられ、10月としても過去7年間で最高となった。また、日本海側では9～10月に過去7年で最高を示し、7月から10月にかけては、1000トン以上の漁獲がみられた。日本海側の年間漁獲量は、過去7年間では平成6年に次ぐものとなった。

日本海の定置網・底建網で漁獲されるマダイはここ3年間連続して減少していたが、本年は112トン記録し、1985年以来では、1992（平成4）年に次いで多い漁獲量となった。

主として定置網で漁獲される日本海のブリは1985年以来最高を記録した前年には及ばないものの、206トンが漁獲され、その水準が高いことを示唆していた。

太平洋のまき網で漁獲されるマサバは不漁だった前年のさらに10分の1以下となる不漁であった。1985年以降では2番目に少ない結果に終わった。日本海のマサバは、不漁だった昨年よりは多いものの、過去11年平均の35トンの約半分にとどまった。

資源の減少が危惧されているマイワシについては、太平洋のまき網による漁獲量が16トンで、依然として低水準となっていた。日本海の定置網で漁獲されるマイワシも1トンを割り、1985年以来最低となった。

海 況

平成8年度の青森県沿岸の海況は、日本海沿岸定線観測・太平洋沖合定線観測結果から求めた対馬暖流（日本海）・津軽暖流（太平洋）の流勢指標を平年と比較することで表現すると次のとおりである。なお、日本海及び太平洋の観測定線図を図1に、流勢指標の暖流幅、津軽暖流張り出し位置、水塊深度については、その模式図を図2および図3に示した。また、平年比較の基準については、章末「参考」に示した。

1. 日本海（観測月 3～7月、9～11月、各月1回）

平成8年の青森県日本海沖合における対馬暖流の勢力は、定線観測結果によると6月にはやや

強勢であったが、9月にはかなり弱めとなっていたと思われる。

表面水温は6月にかなり高めの他は、10月やや高め、11月やや低めであった。50m層水温は7月やや低め、9月かなり低めで、その後はやや低めで推移した。100m層水温は9月にかなり低めであった。

100m 5℃等温線の岸からの位置で対馬暖流の流幅をみると、鰹作崎線では3月やや広め、4月かなり狭め、5月やや狭めで、9月にはかなり狭くなった。その後も10月かなり広め、11月やや狭めと変動が大きかった。また、十三線では3月やや広めの後には平年並が続き、9月には鰹作線と同様にかなり狭めとなった。しかし、その後は鰹作線と逆の傾向を示し、10月かなり狭め、11月やや広めとなった。

水塊深度を7℃等温線の最深度でみると、5月はやや浅め、6月はやや深めで、9月には再びやや浅めとなっていた。

対馬暖流の北上流量を水深300m層を無流面とした地衡流量でみると、6月にやや多め、9月及び11月にはやや少なめとなっていた。

2. 太平洋（観測月 3月、6月、9月、11月、各月1回）

平成8年の青森県太平洋沖合における津軽暖流の勢力は、3月にかなり弱く、その後は概ね平年並に推移した。

表面水温は6月にやや低めの他は平年並であった。50m層水温は3月と9月にやや低めであった。100m層水温も3月にやや低め、6月にやや高めと、めだった偏差はみられなかった。

津軽暖流の深さを尻屋崎線における7℃等温線の最深度でみると、3月には最高水温が6℃台だったため、水塊深度としてはとらえられなかった。しかし、6月にはやや深め、11月にもやや深めとなった。

津軽暖流の張り出し位置を尻屋崎線における100m 5℃以上塩分33.7psu以上の東端位置でみると、やはり3月には33.7psu以上の値がみられなかったため、とらえることができなかった。6月もやや弱めであったが、それ以降は平年並であった。

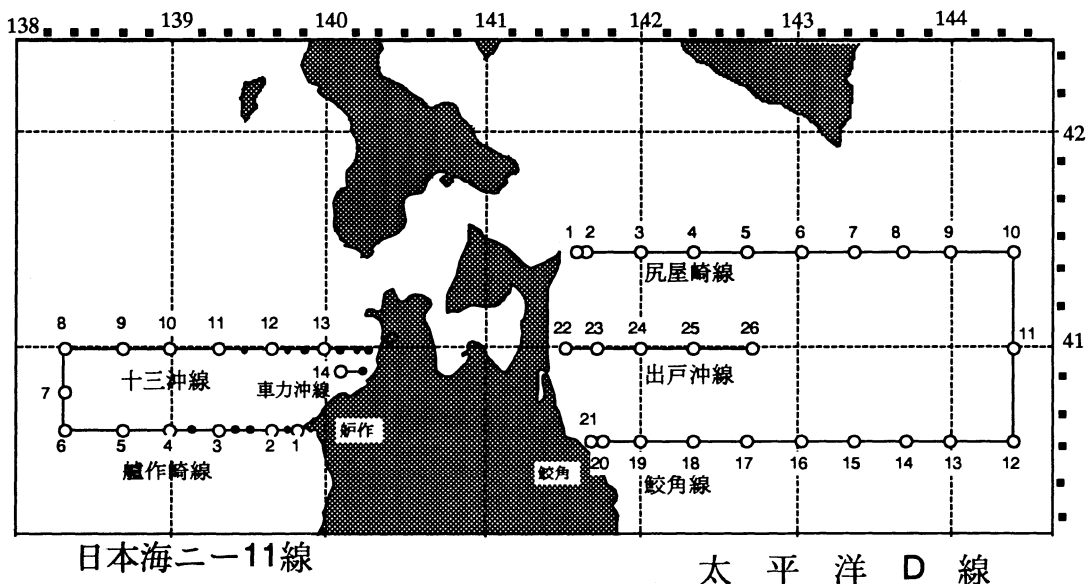


図1 太平洋及び日本海の観測定線

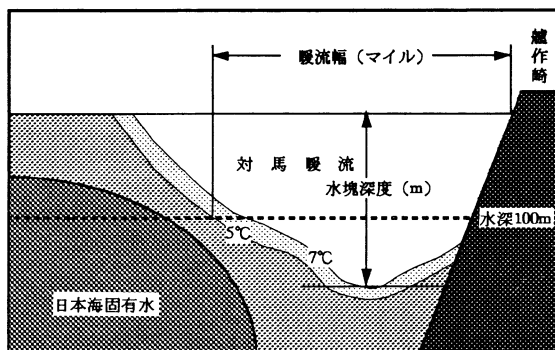


図2 津作崎鉛直断面模式図

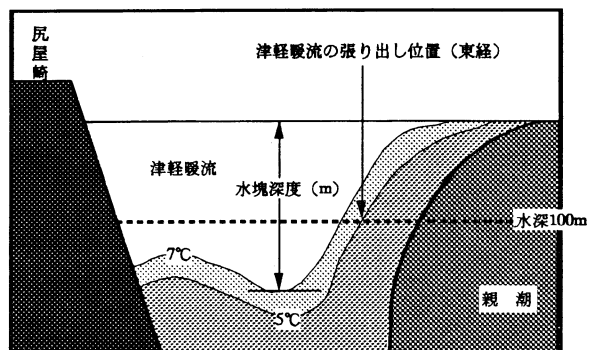


図3 尻屋崎鉛直断面模式図

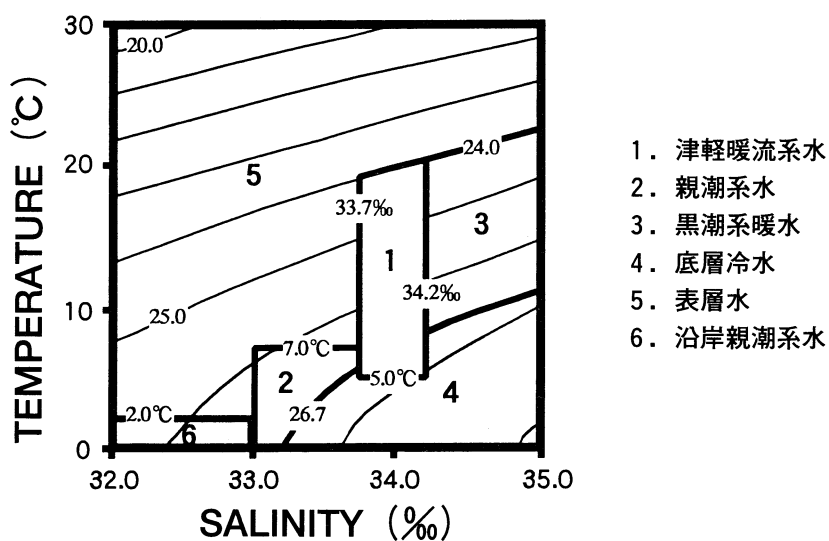


図4 花輪、三寺（1986年）等の水塊分類法

津軽暖流水は塩分33.7～34.2psu、水温5℃以上、密度（ σ_t ）24.0以下で規定される。

参考 平年比較の度合い（気象庁の海面水温偏差の階級区分を参考にした）

表 現	偏差比（標準偏差に対する割合）		
はなはだ高い	+ 200%以上		（およそ44年に1回の発生に相当）
かなり高い	+ 130%以上	+ 200%未満	（およそ14年に1回の発生に相当）
やや高い	+ 60%以上	+ 130%未満	（およそ6年に1回の発生に相当）
平年並	- 60%以上	+ 60%未満	（およそ2年に1回の発生に相当）
やや低い	- 130%以上	- 60%未満	（およそ6年に1回の発生に相当）
かなり低い	- 200%以上	- 130%未満	（およそ14年に1回の発生に相当）
はなはだ低い		- 200%未満	（およそ44年に1回の発生に相当）